

ヘンリー・スミス著『新人会の研究 日本学生運動の源流』（東京大学出版会、1978年）より、創刊初期の「帝国大学新聞」に言及している部分

第5章「新人会の学内活動」の3「シンパの獲得」（123 - 125 ページ）

『帝国大学新聞』もまた、多くの学生に効果的に働きかけることのできる合法的手段として大きな利用価値があったから、新人会からの働きかけも、当然活発であった。この新聞は、一九二〇年一二月、三人の若い卒業生の手による学外の私的事業として発足し、その目的は、各学部学生間の、そして学生と卒業生間の意思疎通を計ることにあった。直接の要因は、同年はじめの森戸事件で各学部の足並みが揃わなかったために反対運動が腰くだけとなったことにあった。創立メンバー三人とも自由主義的傾向の持主であったが、そろって元運動部の猛者という急進派からはほど遠い存在で、自分たちの使命は、改革を叫ぶというより、愛校心を維持することにあると考えていた。『帝国大学新聞』は、創刊後二年以上もタブロイド版でしかも月刊であり、その紙面は古くさい悲憤慷慨調でおおわれていたが、やがて編集陣に文学的というよりジャーナリスト的感覚を持った学生が増えるにつれ、ニュース中心の進歩的新聞の色彩を強め、月刊から週刊へ、タブロイド版から普通の新聞紙版へと成長していった。一九二三年春から、この新聞を学内の進歩陣営の言論機関にするというはっきりした任務を負って新人会員が編集局に入りこんだ。『帝国大学新聞』は、広告とくに教科書出版社の広告のおかげで財政的に安定していたし、一般の新聞ほど検閲が厳しくなかったから、新人会もその主導権を狙っていた。

一九二四年一月になると編集委員十五人中の八人までが新人会の会員で占められるようになった。この割合はその後数年間に少し落ちたが、新人会は社内で隠然たる力を持ち、紙面はつねに左翼勢力に好意的であった。新人会の影響によって『帝国大学新聞』には強い自由主義の伝統が確立し、戦時下、すべての左翼出版物が禁圧され、自由主義的な刊行物も沈黙を余儀なくされた後までも、その伝統はよく保持されたのである。この新聞で活躍した新人会員の大半はジャーナリズムそのものに純粹な興味を寄せ、革命の煽動に本気で取組むつもりの方はあまりいなかった。プロのジャーナリストは、何物にも酔わぬ眼が要求される。そのため新聞社の新人会員は、新人会の中心をなす肩を怒らせた急進左翼と一線を画する結果となった。『帝国大学新聞』の編集にたずさわった二十数人の新人会員のうち、一人も日本共産党に入党した者がいなかったのは偶然ではない。

<解説>

『東京大学新聞』の前身『帝国大学新聞』は1920年12月に創刊されたが、その創刊号を含めて、おおむね1923年（大正12年）8月までの五十号余が、関東大震災の劫火で焼けたのか現存していない。この時期に新人会メンバーが入部して『帝国大学新聞』は大きな成長を遂げるが、スミス氏の研究はその時期に焦点を当てた貴重なものである。